

名著選讀的指導初試

——以森鷗外『高瀨舟』為例——

林雪星

東吳大學日本語文學系副教授

中文摘要

筆者認為利用名著選讀的時間讓學生讀文學作品，可藉著文學作品所表現的人生百態、想法、看法、以及作者的語言表現，達到培養學生的想像力，加深學生的讀解能力，並可提高學生的語言表現能力。本論將以森鷗外的小說『高瀨舟』為例，試以文學教育的方法與學生解讀此作品。

首先將全班先行分組，選擇欲發表的小說。並請擔任發表的同學，就作者介紹、文本的解讀、關鍵字、主題、問題點提出來討論。透過此過程的發表，可知道學生對於文章的理解程度。本論提出有關『高瀨舟』的主題「知足」與「安樂死」，並就主要人物喜助與庄兵衛的心理變化，以及喜助殺弟之事是否是「安樂死」？亦或是喜助為了解脫困境的一面之辭？其中有關喜助滿足的是兩百文錢？亦或是被宣判流放外島反而有了固定的住所而高興？除了仔細讀解文本之外，也提出研究者的學說來探討文章潛藏的意涵。

關鍵詞：高瀨舟、高瀨川、遠島、喜助、庄兵衛、二百文、權威

名著選読の指導試行

—— 森鷗外『高瀬舟』を例として ——

林雪星

東呉大学日本語文学科副教授

要 旨

文学作品を授業の題材として教えるとき、学習者はそれによって、読解力を深めたり、想像力を培ったり、心を養ったりすることができる。しかも、それは言葉の教育にも繋がっていると思う。筆者は名著の時間で、森鷗外の小説『高瀬舟』を例として、文学教育のやり方でやってみようとした。

まずグループ分けにしてから、それぞれのグループに担当の作品を決める。担当するグループはまず、作者の紹介、テキストの読み、キーワード、主題、問題点を取り出して、それをプリントにしてクラスメートに配る。それによって学習者は作品をどのくらい把握できるかということが分かる。小論には『高瀬舟』の通説のような二つの主題「足ることを知る」と「ユウタナジー」を学習者に提出しておく。また、各文学研究者の論説を取り出して、読みの支えにもなると思いながら、「喜助」を読む庄兵衛と「弟」を読む喜助を重点として学習者にも考えさせた。それを通して、各グループはそれぞれの質問を取り出して討論してみた。学習者は二百文で満足できる喜助に疑問を持っていた。さらに、「ユウタナジー」の問題について、疑問を提出した。

キーワード：高瀬舟、高瀬川、遠島、喜助、庄兵衛、二百文、オオトリテエ

An Innovative Method of Teaching “Select Readings from Representative Works in Japanese Literature” — a Study of Moriougai’s Takasebune

Lin, Hsueh-Hsing

Department Japanese Language and Culture, Soochow University

Abstract

I believe to concentrate this course on the study of literary works, with an emphasis on the understanding of life experiences revealed in the works, can inspire students' imagination, enlighten on their apprehension of literature, and improve their language skills. This essay explains the conduction of this course by bringing examples from the study of Moriougai's novel, *Takasebune*.

Students are divided into groups and requested to work on a novel of their choice picked from a reading list prepared by the instructor. Each group is required to prepare printed handouts on the very work for the whole class and to give an oral presentation which includes introduction of the author, analysis of the work, and proposal of questions for discussion. This is an effective way to evaluate students' learning. The study focuses on two themes: complacency and euthanasia, exploring issues such as the psychological transformation of the main characters, the judgement on Kisuke's killing of his brother, and the dilemmas that the characters face in their life.

Key words: Takasebune, Takasegawa, Exile, Kisuke, Syoubeei, Authority

名著選読の指導試行

—— 森鷗外『高瀬舟』を例として ——

林雪星

東呉大学日本語文学科副教授

1. はじめに

名著選読は東呉大学の日本語学科四年生の必修科目である。名著選読の位置づけについて、それは高級日本語の延長と定義されたのは、つい三、四年のことである。筆者の大学時代には名著選読は三年生から四年生まで必修科目として勉強しなければならない科目であった。その時、読んだものはすべて小説であった。筆者は名著選読がただ単なる語釈、あるいは言葉の言い換え、内容の理解に限られるとは納得できない。「名著」を読むことを通して、自分の何が変化したのか、クラスメートはどんなことを考えたのか、またそのクラスメートの考えを聞いて自分はどのように感じたのかといったことを知り、それを認めていく心を養いたいと考えるなら、やはり文学作品を教材にしたいと思う。なぜかという、文学作品は人間の多様な姿が書き込まれているし、そこに表現された人間のさまざまな側面を知ることができるからである。また、文学作品は言葉によって描き出されているので、言葉の教育にも繋がっていくのは、当然のことである。

教材の選定にはどのような基準を要するかと言うと、まず府川源一郎の「文学教

育の危機」¹を引用して説明する。

読み手の問題意識をかき立て、想像力をはばたかせるような作品を選択する必要がある。また現代を生きる私たちの抱えているさまざまな問題に切り込み、それを一人の人間として深く考えるきっかけを与えてくれるような作品も必要である。

府川氏の述べたように「読み手の問題意識をかき立て、想像力をはばたかせる」という意識を持って、学習者に現代社会における様々な問題に直面するとき、一人の人間として考えさせようとする。本稿で森鷗外の『高瀬舟』を教材とした理由は、やはりその作品には社会性や人間性が潜んでいるからである。

本稿では森鷗外の『高瀬舟』を教材に、日本語専攻の四年生の学習者を対象とし、教材の内容から作品の構造や登場人物の心理変化、語りの作用、主題、キーワードと文章とのつながり、学習者の異文化への理解について、分析しようと思う。それによって、学習者の正しい読みを培ったり、文学作品を鑑賞したりする力をつけることが目的である。

1-1 教室活動

一クラスの人数は70名近い、グループわけをすると、8人か9人が一グループになる。まず、作者の森鷗外を紹介したり、『高瀬舟』にかかわる歴史小説を紹介した後で、全クラスで『高瀬舟』の一段を読む。その内容をしっかり理解した上で、主人公の心理はどうであるか、その表現には何か魅力的なところがあるか、また、自分の好きな描写はどこにあるのかと学習者に聞く。それから本文に関するキーワ

1 府川源一郎「文学教育の危機」『国文学 解釈と鑑賞』1998年7月号 P12

ードを学生に提出させると同時に、提出した理由を述べさせる。討論や質問が終わってから、また前へ進んで読む。全文を読み終えてから、グループにレポートを提出させる。授業時間は約6時間になる。それを通して、学習者の理解や発想や見方や考え方を確かめることが出来るし、学習者がいかにして文学作品を読むべきかということも分かる。

1-2 教材としての「高瀬舟」の読み方

「高瀬舟」は大正五年一月「中央公論」に発表され、のち単行本『高瀬舟』（春陽堂大正7年）に収録される。本稿は岩波書店「森鷗外全集 第十六巻」によるものである。授業中、『高瀬舟』を書くきっかけについて『高瀬舟縁起』で触れたことがあるが、それを教材としては省こうと考えていた。なぜかという、それを読む時間はないと思ったからである。『高瀬舟縁起』には二つの主題「知足の問題」と「ユウタナジーの問題」が存在しているというのが、従来の見方である。それを学習者に提示し、考えさせたり想像力をはばたかせたりするのが最初の目的であった。まず、『高瀬舟』の構成について述べようと思う。

物語のはじめには高瀬舟が罪人を乗せて京都の高瀬川を上下し、大阪へ回る小船であるから始まる。「その船に乗った罪人は重い科をおかしたものと認められた人ではあるが、決して盗みをするために、人を殺し、火を放ったというような獰悪な人物が多数を占めていたわけではない。」と語り手によって語られる。または護送の同心庄兵衛が高瀬舟に乗った罪人喜助に関心を持つにいたるプロセスが描かれている。さらに喜助の弟殺しのわけを聞き、庄兵衛の内心の動揺が描かれている。最後には、庄兵衛の「喜助の弟殺しが罪か」という疑念や「オオトリテエ」に対する沈黙が語られている。ここで重要な人物は喜助と庄兵衛である。ストーリーの構造は語り手による叙述に従い、庄兵衛と喜助との対話などから成り立つ。そこには、喜助を読む庄兵衛と弟を読む喜助のレベルから読みの可能性が考えられる。まず、

『高瀬舟』の起源、歴史的背景を説明してから、以上の「読み」の可能性について検討しようと思う。

2. 「高瀬舟」について

物語は高瀬舟に乗っている同心の庄兵衛と罪人の喜助の対話によって始まる。そのために、高瀬舟を明示する必要がある。

高瀬舟は京都の高瀬川を上下する小舟である。徳川時代に京都の罪人が遠島を申し渡されると、本人の親類が牢屋敷へ呼び出されて、そこで暇乞いをすることを許された。それから罪人は高瀬舟に載せられて、大阪へ廻されることであつた。それを護送するのは、京都町奉行の配下にゐる同心で、此同心は罪人の親類中で、主たつた一人を、大阪まで同船させることを許す慣例であつた。これは上へ通つた事ではないが、所謂大目に見るのであつた、黙許であつた。

引用文を読むと、いくつかの情報が得られる。まず、高瀬舟は遠島を言い渡される罪人を載せる小舟である。また、この舟に罪人の親類を一人同船することを黙許される。しかし、そこから、疑問が出る。罪人の親類が牢屋敷へ来て罪人と暇乞いをするのですでに十分ではないか。なぜ、お上はまた高瀬舟に親類の一人を同船させることを黙許するのか。そこで一つのキーワードの謎を解かなければならない。そして、遠島とは何か。遠島を言い渡された罪人は、どんな過ちをおかしたのか。

それを明示する必要がある。『日本国語大辞典』²によると、「遠島とは江戸時代の刑罰の一つ。ばくちをした者、女犯の僧、誤って人を殺した者などを伊豆大島などの遠島に送る刑。追放より重く、死罪より軽い、島流し、流罪」という。語り手は次の節で「当時遠島を言い渡された罪人は獐悪な人物が多数を占めていたわけではない。」「心得違いのために、思わぬ科を犯した人であつた。」と述べた。また、遠島を言い渡される罪人は、その行為は「罪」とは呼ばず、「咎」と呼んでいる。両者の差異は『広辞苑』³によると、罪とは社会規範、風俗、道徳などに反した悪行、過失、災禍など、咎とは非難されるような欠点、短所と書いてある。だから、罪人の行為は罪になっているが、遠島を言い渡される罰を受けるのは、重すぎるのではないかという感じがする。読者のわれわれにはそう思われるが、罪人自身やその親類は重すぎると思う可能性もある。罪人と親類の一人は高瀬舟で「夜どほし身の上を語り合ふ」「いつもいつも悔やんでも還らぬ繰言である」には、お上の裁きに対する不平不満な心持がないわけではないとは言えるであろう。だからこそ、お上は罪人と親類の不満を発散させるために、高瀬舟を同船させることに黙許してくれるはずである。その見方は竹内常一の「〈再審の場〉としての「高瀬舟」」⁴にも書いてある。

2-1. 物語の時代背景

物語は同心・庄兵衛が喜助に関心を持つにいたるプロセスを描いているところから始まる。語り手は「いつの頃であつたか。多分江戸で白河楽翁侯が政柄を執つて

2 国語大辞典（縮刷版）第二巻 1979年10月20日に初出版、1990年10月20日に第一版第十二刷発行。

3 広辞苑第六版 2008年1月11日第六版第一刷発行。

4 「〈再審の場〉としての「高瀬舟」 竹内常一 『〈新しい作品論〉へ〈新しい教材論〉へ 田中実・須貝千里編著、右文書院 1999年2月25日P70

みた寛政の頃でもあつただらう」ということから語り始めている。白河楽翁侯とは誰であろうか。日本の歴史を勉強していない学習者もいるから、その白河楽翁侯や寛政の改革について説明する必要がある。白河楽翁侯とは田沼時代のあとを受けて老中となった松平定信である。彼の行った寛政改革によって儉約令、他国出稼ぎの制度、人足寄り場の浮浪者の一掃、市中の風紀の肅正、幕府財政の健全化、旗本、御家人の救済のために棄捐令などの緊縮政策によって、幕府の体制を立て直そうとするものである。物語に出た喜助たちのような住所不定のものには、抑圧的であったことはいうまでもない。この点に学習者を注意させたい。

2-2. キーワード

キーワードは小説を理解するとき大切なポイントである。学習者にキーワードを挙げさせてみたら、以下の言葉であった。

① 高瀬川と高瀬舟

語り手は冒頭で「高瀬舟は京都の高瀬川を上下する小舟である」と語った。川の水は船を載せたり沈ませたりする可能性があるのも、「生」と「死」に結びついたイメージを与えられる。高瀬川は罪人にとっては日常生活から排除されたり追放されたりする三途の川のようなイメージでもある。また、喜助にとっては弟殺しの行為は有罪なのか、無罪なのか、善であるか、悪であるかという空間が象徴される。

「高瀬舟」は、高瀬川の上で揺らめいている。その船に乗っている庄兵衛にとっては、高瀬船は様々な既存の価値観なり認識なりが揺れる空間である。なぜかという、船の中で揺れながら、庄兵衛は喜助を観察し、「不思議」だと思い、事前の情報とのずれを感じる。「目も当てられぬ気の毒な様子」をしているはずの喜助は、「いかにも楽しそうで」「遊山船にでも乗ったような顔」をしているからである。すなわち、喜助の表情は罪人のイメージが反転するのである。しかし、庄兵衛と喜助と対話した後、庄兵衛は喜助の立場になって、お上の裁きに疑問を投げた。すな

わち、庄兵衛の今までの価値観は動揺していた。

② 庄兵衛

庄兵衛の設置は作者森鷗外の影があると諸説に論じられているが、この部分については省略する。庄兵衛は官僚制度の最下端にある下級官吏である。妻子と老母、一家七人の生計を立てなければならない庄兵衛は、「借財」というものを毛虫のように嫌う人間である。豊かな妻の実家から物をもらうことを知ったら家庭で波風が起ころうというほど潔白で、プライトが高い男である。喜助の「二百文」で満足することを見て、自分を反省した。さらに喜助の「足ることを知る」ことに感服しながら、喜助がまるで神様のように欲のない人間と認めた。そのような人間がなぜ弟殺しをしたのかと、喜助にそのわけを求めた。喜助の話を聞いた後で、お上の裁きを疑い始めた。しかし、疑っても下級官吏の庄兵衛はお上の判断に任せるしかない。いわゆる庄兵衛は良心が芽生えてきたもう一人の庄兵衛を抑えてお上の判断に任せるしかない。

③ 喜助さん

『高瀬舟』には欠かせない二人は庄兵衛と喜助である。庄兵衛と喜助との対話から物語が展開される。庄兵衛ははじめに罪人に「喜助」と呼んだのは、官吏から罪人に相応しい呼びであったが、無意識に「さん」を附けたのは、庄兵衛の心理状態の変化を自然に現した。言い換えれば、喜助さんと呼んだ庄兵衛は、喜助に感服しながら、官吏の立場から喜助の立場に移動するおもむきがある。そのためか、喜助の弟殺しの経緯を話の半分に、お上の裁きに疑問を起こしたきっかけになったのではないか。

④ 毫光

「毫光」とは仏の眉間の白毫から四方に出る細い光で、仏の知恵にたとえられる。これは喜助の「知足」に関連するキーワードである。人間は欲が限りない。どこまで踏みとどめられるか分らない。しかし、庄兵衛の目の前に喜助は「二百文」で

満足することができる。喜助の足ることを知っている平静の心には、「知足」とは言えないが、実はあの極貧の生活と切り離しては考えられぬ、一種異常な非人間的な状態なのである。森鷗外のもう一つの作品には「毫光」というテーマがある。そこには崇高な道德がある主人公のことを語った作品である。さらに、「山椒大夫」に安寿が厨子王のために自己を犠牲して弟の生を完成させようとしたところにも「毫光」という言葉を使っている。

⑤ 二百文の鳥足

喜助の話には「二百文の鳥足」が出てから、「無欲」か「欲があるか」という見方がある。二百文のお金で満足できるのは、普通の生活秩序に根をおろした常識道德や社会通念では、通用しないであろう。しかし、この言葉は庄兵衛の喜助を見る目に大きな働きをする重要な言葉である。

⑥ オオトリテエ

語り手が「オオトリテエ」というフランス語を持ち出した理由はどこにあるのか。それは語り手は江戸時代の人物、庄兵衛に「悩んでいる近代人」の役割を与えて、「権威」に疑いを持ち出した庄兵衛の覚醒は、果たして「オオトリテエに従う」と、喜助のように晴れやかな生が得られるのか。それは語り手が読者にいろいろ考えさせることであろう。

3. 学習者の問題点

学習者にレポートを提出させたり、まとめてみると、以下のような問題点が出てきた。

- ① 高瀬舟に載せられた罪人は、どうして思った一人の親類を、大阪まで同船させることを大目にみられるのだろうか。
- ② ただの二百文を持った喜助が、足ることを知るのをどこから証明できるか。

- ③ 弟を死なせた喜助が半年後に高瀬舟に乗ったときに、晴れやかな表情をしていたのはなぜか。また、喜助の弟は「目を半分あいた儘死んでゐる」ことから見れば、その弟の死は何か恨んでいるのではないか。
- ④ 喜助の言葉は果たしてどのくらいが真実なのだろうか。「これは半年ほどの間……注意に注意を加えて……とのためである。」もし、この叙述は庄兵衛の推測だけなら、喜助の話がすべて事実とは証明できない。
- ⑤ 庄兵衛は最後、喜助のやったことが罪であろうかという問題を上の人の判断に任せ、お奉行様の判断をそのまま自分の判断にしようと思ったことは、下の人はどう思っても、最後はやはり上の人の決定に従うしかない当時の官僚体制への批判なのか。また、「…どこやらに腑に落ちぬものが残っている…お奉行様に聞いてみたくてならなかった。」との叙述も社会の下層に生きている人の矛盾やどうしようもない気持ちを作者がほのめかしたというのか。
- ⑥ 高瀬舟は歴史小説なのに、なぜオオトリテエというフランス語が使われたか。
- 学習者の問題点について、以下のように説明してきた。
- ① について、それはお上は罪人と親類の不満を発散させるために、高瀬舟を同船させることに黙許してくれるはずであると説明しても、学習者は自分なりの考えを以下のように提出した。

本文の通りで、高瀬舟に乗る罪人は、みんな猙獰な人物ではありません、一応思わぬ過ちを犯した人の方が多いです。そんな罪人の人柄は普通の人たちとあまり変わりませんが、一時に心得が違い、不意に科を犯したのせいで、牢屋敷に入りました。その遠島を申しされたのは悪人にとって、自分の未来や理想も叶えぬまま遠いところに過ぎました。この社会を遠さがっていくこの舟は、加茂川を最後の道になります。そこで自分自身の寂しいも悲しいも特に感じられます。黒澄んだ両旁の屋

敷を見て、突然に自殺とか川を飛んだこともよく起きているはずで。
それを予防し、罪人の一番重要な人を、高瀬舟に連れていて、罪人に伴
うと思いました。（下線は筆者）

学習者の考えは比較的近代的な若者の思考方式らしい。不平不満があったとき、どうしても出来ない場合、死を持って抵抗するしかないという匂いがする。いわゆる罪人の自殺を防ぐために、親類の一人を高瀬舟に載せるのである。しかし、それは推測に過ぎない。本文をじっくり読んだら、罪人が其の親類の者とは「夜どおし身の上を語りあう」とか「悔やんでも還られぬ」と書いてあるが、それによって、罪人は高瀬舟に乗って自殺しようという証拠はないからだ。それはあくまで学習者の自分なりの推測であろう。

- ②「ただの二百文を持った喜助は、足ることを知るのをどこから証明できるか。」

について、本文に戻り読み直した結果、いくつかの証拠が得られる。まず、喜助は二百文というお金を貯金として持っていたことはない。いつも、右から左へ人手に渡さなくてはならない。つぎに牢に入って働かずに食べられるので、二百文は使わずに持っていることができた。お金を自分のものとして持っていることは、喜助にとっては初めてである。さらに、牢を出てから「此の二百文を島でする為事の本手にしようと楽しんでをります」によれば、喜助は足ることを知ることを証明できる。

- ③ の質問については、台湾の風習によると、なくなった人の眼は半分ぐらい開いたのは、恨みがあるとか残念なことがあるとかいう。学生はそれによると、喜助の弟は自殺ではないが、喜助に殺されたという推測さえも出た。日本ではそういう風習があるかどうか、筆者にははっきり分からないから、その場で、それを課題として調べようと言っておく。また、「弟を死なせた喜助が

半年後に高瀬舟に乗ったときに、晴れやかな表情をしていたのはなぜか。」について、竹内常一〈再審の場〉としての「高瀬舟」の説を借用して説明した。その理由はまず、喜助が弟の献身的な行為によって与えられた生をまっとうすることができるようになったというところにある。言い換えれば、喜助にとっては生きることが弟の献身的行為に応えることであったのである。次に、喜助自ら進んで受け入れた罪を遠島という罰によって償うことができるということにある。最後に、だれかを犠牲にしなければ自分が生きられない「苦」から解放され、二百文を元手にして島で仕事をするようになるということにある。

④ について、語り手は確かに喜助の話を何回も注意に注意を加えて条理が立ちすぎると提示する。それについて、たしかに庄兵衛の語りを通して、当時の事件の様子を想像するしかない。さらに、庄兵衛の語りはまた喜助の話を読者のわれわれに伝えてくれるので、話の真実性は疑われる可能性もあろう。即ち喜助の弟の目の色を正しく読み取れるかどうかにかかわる。もし、喜助は弟の目の色を間違って読み取ったら、本当の弟殺しになるかもしれない。その場で、学習者の意見を否定しなかったが、クラス全員に課題として考えさせようとした。

⑤ については、下級官僚は「どう思っても、最後はやはり上の人の決定に従うしかない。」という。表面には当時小役人の思量の限界を呈しながら、本音には権威を権威として奉ることによって、権威の支配をつき抜けようという意志が読み取れる。

⑥ 『高瀬舟』に「オオトリテエ」というフランス語が使われた理由は、どこにあるか。それは丹藤博文の「教材としての『高瀬舟』」⁵を参考にしながら、

5 丹藤博文「教材としての『高瀬舟』」『日本語学』2004年7月号 p.47

キーワードの⑥と同じように「それは語り手は江戸時代の人物、庄兵衛に「悩んでいる近代人」の役割を与えて、「権威」に疑いを持ち出した庄兵衛の覚醒は、果たして「オオトリテエに従う」と、喜助のように晴れやかな生が得られるのか。それは語り手が読者にいろいろ考えさせることであろう。」と説明した。

4. 喜助と庄兵衛との読み方

従来「高瀬舟」の研究には田中実・須貝千里編著による『〈新しい作品論〉へ、〈新しい教材論〉』および『文学の力×教材の力』がある。前者には石田忠彦の「高瀬舟」論と竹内常一「〈再審〉の場としての『高瀬舟』」が掲載されている。後者には菅聡子は「森鷗外『高瀬舟』を（読むこと）」⁶と、角谷有一は「プロットの読みを深める」⁷を発表している。それらの論説には語りの視点人物は「庄兵衛」にある竹内と菅の説があり、また「喜助」にあるという角谷の説もある。

私たちはこれから語られる喜助の様子はすべて庄兵衛を視点とするものであることに注意しなければならない。それと同時に、視点人物である庄兵衛に同化するだけでなく、かれを異化して読みすすめるなければならない。／さらに、先取りしていえば、語り手が喜助とはどういう存在であるかをほとんど語っていないということ、したがって、私たちはそれらにもとづいて喜助とは何かを想像するほかないことにも注意しなければならない。

6 菅聡子「森鷗外『高瀬舟』を（読むこと）」『文学の力×教材力』中学校三年 教育出版 2001年

7 角谷有一「プロットの読みを深める」『文学の力×教材力』中学校三年 教育出版 2001年

以上の引用は竹内の説である。まとめて言うと、語りの視点は庄兵衛にある場合、喜助のことをすべて庄兵衛を通してしか理解できない。語り手が喜助の内面についてほとんど語っていないということである。菅の論文も同じ立場に立っている。すなわち、「『高瀬舟』は庄兵衛を視点人物として、一方向から喜助の語りを伝えているため、喜助の内面を読者が知ることはできない」と述べている。そうすると、「高瀬舟」の読みは庄兵衛を視点人物として喜助の内面は庄兵衛を通してしか伺われないという読み方である。もう一つの可能性は角谷有一の「喜助の内面」を読もうとするものである。言い換えれば、喜助の精神が「弟殺し」を経て、どのように変容したのかと言う問題をこの作品の読みの大きな課題としている。本稿ではこの二つの可能性を学習者に提供したり討論させたりする。まず、庄兵衛の視点から考えてみよう。

① 喜助を読む庄兵衛（庄兵衛の視点に立つ）

庄兵衛は喜助に対する事前情報を得たのは「彼が弟殺しの犯人」ということである。その情報と庄兵衛の目に浮かんできた喜助の行為、表情はいかにもずれがある。「いかにも神妙に、いかにもおとなしく、自分をば公儀の役人として敬つて」「温順を装つて権勢に媚びる態度ではない」と、その男がなぜ「弟殺し」の罪を犯したのかと庄兵衛は最初から疑っていたので、喜助をよく注意する。喜助を側面から観察するうちに、喜助の表情には「いかにも楽しさうで、若し役人に對する気兼ねがなかつたなら、口笛を吹きはじめるとか、鼻歌を歌い出すとかしきうに」「遊山舟」にでも乗ったような顔をするを見ると、事前情報とギャップが生まれるところである。ここまでは喜助の表情とか動作とかは庄兵衛の観察によって現れる。一緒に生きてきた弟を殺したのはいい気分にならないはずであるが、どうして喜助は楽な心持になれるのか。学習者は読むうちに庄兵衛と同化して、そのわけを知りたがっているので、ストーリーの進展に深い興味を持ち始める。それから、庄兵衛は喜助にわけを求めるために、喜助との直接対話から、喜助の弟殺しの理由やその話

を聞きながら庄兵衛の心理変化の一端が伺われる。まず、喜助の語りの部分を引き出してみよう。

「・・・京都は結構な土地ではございますが、その結構な土地で、これまでわたくしのいたして参つたやうな苦しきは、どこへ参つてもなからうと存じます。お上のお慈悲で、命を助けて島へ遣つて下さいます。島はよしやつらい所でも、鬼の栖む所ではございますまい。わたくしはこれまで、どこと云つて自分のゐて好い所と云ふものがございませんでした。こんどお上で島にゐろと仰つて下さいます。そのゐろと仰る所に、落ちてゐることが出来ますのが、先づ何よりも有難い事でございます。（中略）それからこんど島へお遣下さるに付きまして、二百文の鳥目を戴きました。それをここに持つてをります。」

長い引用文にはいくつかの情報が隠れている。順序から見ると、まず、京都は喜助兄弟にとっては、普通の人には結構な土地であるが、喜助兄弟にとっては鬼の栖む所としか認められなかった。そのような悲惨な所で生きられてきたので、どこへ行っても生きられると喜助は自信を持つはずである。（一方、その言葉には喜助の恨みや皮肉が潜んでいるとも言える。）次に、「お上で島にゐろと仰つて下さいます。そのゐろと仰る所に、落ちてゐることが出来ます」、さらに「お牢に這入ってからは、仕事をせずに食べさせていただきます」、最後は「二百文のお金を持つことができる。喜助が大事にしたのは落ち着くところできたということをさす、**「二百文」**という財産は最後の番になった。いつも住所不定な喜助は、命を繋ぐために、あちこちを流転したり仕事を探したので、落ち着くところはなかなかなかった。しかし、今度牢に入れられてやっと落ち着くことができる。また、牢に入る前に仕事が**「見つかり次第、骨を惜しまず」**に働いた。それにしても、兄弟二人

は飢え死を凌ぐぐらいであった。しかし、いま牢に入れられて、「為事をせずに食べさせて戴きます」さらに、「二百文のお金」をもらえる。それに対して、喜助はお上に感謝すると言ったが、その内面的な皮肉の意味も隠れている。というのは、働いて給料をもらい、生活するのは当たり前であるが、努力してきた人間が牢に入れられて「何もしない」人間より生活が苦しいとは、どういうわけであろうか。喜助の嬉しい心持には、やはり世の中を皮肉する匂いを漂わせる。

しかし、庄兵衛は注目するのは、喜助の二百文を持って満足するという点である。それに対して、庄兵衛は自分のことを省みると、自分と喜助との差は「十露盤の桁の違つて」いるだけと言ったが、果たして十露盤の桁の違いだけであろうか。下級官僚の庄兵衛は置かれる社会の地位は喜助の「軒下に生まれた狗の子のように」見られる社会の最低層の人間と比べれば、やはり自由や自尊心を保つことが出来る。両者の差がはっきり分かるが、庄兵衛の後ろに隠れている作者は「足ることを知る」の観念を引き出したいという目的で、わざと設置されたのではないか。庄兵衛は「不思議なのは喜助の慾のないこと、足ることを知つてゐること」と思う。しかし、喜助は本当に慾のない人間であろうか。学習者をいろいろ検討させた結果、それは否定の結果が出た。証拠は「わたくしは此二百文を島でする為事の本手にしようと楽しんでをります」という喜助の言葉に見られる。慾がないなら、将来仕事の資本にする必要はないからである。人間の慾がどこまで踏み止るかわからないのが一般の実情だと思う。しかし、喜助が「目の前で踏み止まつてみせてくれる」と庄兵衛は思いながら喜助を神様のように認めるうちに、「空を仰いでゐる喜助の頭から毫光がさすように」と思ったのは、誇張しすぎるのではないか。なぜかという、喜助の足ることを知る平静なるものは、あの極めて貧しい生活と切り離しては考えられない、一種異常な非人間的な状態なのである。庄兵衛は「喜助さん」と無意識のうちに「さん」をつけたのは、庄兵衛が喜助を感服して役人と犯人との対応を脱したのである。庄兵衛は喜助に「弟殺し」のわけを求めるプロセスには、喜助に感

服した上に、喜助に同情しながら、喜助の立場に移動し始めた。

喜助の話によると、喜助兄弟は余人が入れないほど密接な関係である。生活でも仕事でも一緒である。まるで一心同体である。二人一生懸命に働きながらやっと飢え死をしのぐことができた。しかし、弟が病気になってから、働き手は兄の喜助しかいなくなった。弟の立場から見れば、それは兄の荷物になるだけである。その兄を楽に生きさせようとする、自分の生を犠牲するしかないと思っていた可能性がある。だからこそ、弟は剃刀で自殺した。すなわち、弟の献身により、兄が生きられることと交換するわけである。庄兵衛は喜助の話を半分聞いているうちに、すぐに「それは罪であるか」という疑問を持ち出したのは、やはり喜助と同化して喜助の立場になって物事を考えていたのではないか。でも一番下級官僚末端にある庄兵衛はこの事件に疑いを持って、お上の裁きに反抗することが出来ない。そのため、喜助と同じ立場になった自分を抑え、お上の判断に任せるしかない、一旦決心をつけたが、やはり「まだどこやらに腑に落ちぬものが残つてゐるので、なんだお奉行様に聴いて見たくてならなかった」。そこから庄兵衛はお上の裁きをどうしても納得できなく、喜助と同じ立場になった同心の姿がまだ浮かんでくる。

② 喜助の視点に立つ（弟を読む喜助）

喜助は弟殺しの人間だが、なぜ「額は晴れやかで、目には微かなかがやきがある」のか。いままで、庄兵衛の伝えからは喜助の内面的なものが読めない。本文に沿って喜助の弟殺しを語る文を取り出して検討してみよう。

喜助の弟は「済まない。どうぞ堪忍してくれ。どうせなほさうにもない病気だから、早く死んで少しでも兄きに楽がさせたいと思つたのだ。」と言って、自分は喜助の荷物になりたくないから自殺したが、死ねないから喜助の助けを求めた。それについて、喜助は「声が出ませんので、黙つて」弟の傷口をじっと見詰める。それから「わたくしはそれだけの事を見て、どうしようと云ふ思案も附かずに、弟の顔を見ました。」一時の出来事に直面したとき、ショックのあまり反応が出来なかつ

たという喜助は、次の瞬間「待つてゐてくれ、お医者を呼んで来るから」と言う。それは一般の人の当たり前の反応であろう。しかし、弟は「怨めしさうな目附きをいたしました」、また「医者なんになる、ああ苦しい、早く抜いてくれ、頼む」というので、喜助は「途方に暮れた」ような心持になった。そこまでは喜助は弟の自殺をぼんやり見ていて、医者と呼ぶことを考えたが、医者を見てもらうお金のことは全然考えなかった。さらに弟の表情が陰悪になって、次第に兄の喜助を催促したり怨めしさうな目付きになったところに注意したい。

弟の目は『早くしろ、早くしろ』と云つて、さも怨めさうにわたくしを見てゐます。わたくしの頭のなかでは、なんだかかう車の輪のやうな物がぐるぐる廻つてゐるやうでございましたが、弟の目は恐ろしい催促を罷めません。その目の怨めしさうなのが段々陰しくなつて来て、とうとう敵の顔をでも睨むやうな、憎憎しい目になってしまひます。（中略）わたくしは『しかたがない、抜いて遣るぞ』と申しました。すると弟の目の色がからりと変わつて、晴やかに、さも嬉しさうになりました。」

以上の引用文から読むと、弟の表情が陰しくなるにしたがつて、どうしようもない喜助は冷静さを失い、「頭が車の輪」のようにぐるぐる廻っている。その弟の目を読む喜助は、弟の自殺を手伝わないと、弟に憎まれると読んでいた。「しかたがない、抜いて遣る」と言ったとき、弟の目の色が「晴やかに、嬉しさうに」変わったと喜助が理解した。すなわち、喜助は弟の死により、兄の生を完成させたい弟の意思を読み取り、弟の代わりに新しい人生をスタートしようというつもりで、「その額に晴れやかで、目が微かにかがやきがある」結果になった。しかし、喜助の弟の目の色を読むとき、誤読はしなかったか。もし、喜助は弟の意思を誤読したら、それは弟の自殺幫助を偽って言ったのではなからうか。この点について学習者に聞

いたらいろいろな意見が出た。その中には喜助は自己弁解しかないという意見や、弟は賢い人で、牢に入れられたら兄に楽をさせることを事前に知っていたから、わざと兄に刃を抜くことを頼んだ。また、いろいろな可能性があるから、「高瀬舟」はまるで、現代のコーナンのように謎がいっぱいあり、面白いという意見もあった。

5. まとめ

多人数のクラスには、一人一人の学習者を発表させるのに、時間がかかりかかる。さらに、討論する時間もあまりないようである。たとえ作品について自分なりの考えがあるとしても、学習者にとっては、発表者に時間を取りすぎるのではないかという懸念を持ちながら、自分の考えを抑えたこともある。だからこそ、グループに作品を読んだ、後レポートを提出させる方法によって、学習者の学習成果を理解する。さらに、次の授業の参考にもなる。もう一つの方法は、キーワードを学習者に明示しながら、文章を鑑賞することである。しかし、それは学習者が見る目は先生の指示に限られる可能性がある。いままで、この二つの方法を使いながら、授業法を模索しているところである。

参考文献

1. 油野良子「高瀬舟」小論『森鷗外——歴史と文学』武田勝彦・高橋新太郎編著 明治書院 1979年6月
2. 清田文武「高瀬舟」『国文学』1998年1月号
3. 府川源一郎「文学教育の危機」『国文学 解釈と鑑賞』至文堂 1998年7月号
4. 竹内常一「〈再審の場〉としての「高瀬舟」」『〈新しい作品論〉へ』田中実・須貝千里著 右文書院 1999年2月25日

5. 菅聡子「森鷗外『高瀬舟』を（読むこと）」『文学の力 X 教材力』中学校三年
教育出版 2001 年
6. 角谷有一「プロットの読みを深める」『文学の力 X 教材力』中学校三年 教育
出版 2001 年
7. 小池隆夫「読み方・文学の教育をふまえて」『国文学解釈と鑑賞』2003 年 1 月
号 特集＝国語教育の危機と日本語
8. 丹藤博文「教材としての『高瀬舟』」日本語学 2004 年 7 月号